

# 軍隊における我が足跡

信 澤 瑞吉郎

弥生町二丁目

「甲種合格」。徴兵官の力強い言葉がズッシリと五体に伝えた。日本国防婦人会の白ダスキの「おめでとうございます」のお祝いの連発に、男子の本懐これ以上なしと胸を張った。

昭和十五年十二月一日、東部六二部隊に入隊、軍隊の第一歩を歩み出したが、最初の入浴で早や官給の靴下を盗まれた。聞いているのが油断大敵と、まずは驚いた。上から下まで一装を着せられ訓練もそこそこ、わずか十日間で営門を出発、芝浦から特別仕立の輸送船に乗り、北支（中国北部）に向かう。

四日後に天津港に着く。港で日本婦人会の湯茶のサービスに若い娘さんが来たので、一度注いでもらった水筒の水を線路にまき、また注いでもらい、それを上官に見られ大目玉をくらう。天津駅の特別引込線にカーテンを下ろして停車した車内で一泊、早朝北京から山海関を経て万里の長城を越えた。万里の長城を見るのは初めてだ。やがて駐屯地石家荘に着き下車、独立混成第八旅団通信隊高木隊に改めて入隊、東京から着装してきた物は身ぐるみ脱いで古着に換えられ、単なる運搬役をさせられた。

いよいよ本格的な初年兵教育が始まり、馬の扱いには閉口し、また食事もコウリヤン、トウモロコシ、と混入した食事にはまいった。

初年兵教育の中で幹部候補生の特別教育を受けるため、正定の幹部候補生隊に入隊、見習い士官となるや原隊に復帰、大隊付きとなる。軍刀を初めて持った珍しさも手伝い、酒に酔ったあげくに、営門に通ずる植樹したばかりの街路樹を中程から切り捨て、部隊の会報に載ってしまった。同期の見習い士官には申し訳なし。全員支那総軍の北京特別教育隊に三か月派遣さる。教育とはいえ、幹部候補生隊とは異なり将校待遇で、休日祭日以外でも時間外は外出自由。毎日たのしい思いで軍隊も見捨てたものではないと思ったほどだった。教育終了して、三たび万里の長城を越え、原隊に帰隊。連日の北京での教育の疲れが出たのか、間もなく高熱に冒され、パラチフスの疑いで大同の野戦病院に隔離されたが、疑いが晴れて二〇日間で退院した時、待っていたのは転属命令だった。連隊本部に呼び出され命令受

領、同期見習い士官第一号の転属者でいささか寂しかった。南方だと知らされ同期生から羨ましがられた。

師団司令部に赴き師団内各部隊からの転属者を掌握し、上海十三軍司令部まで指揮輸送を命ぜられる。司令部の庭は十一月ともなると早十センチぐらい雪が積もり、見送る将兵は防寒服に身を固めているのに引き換え、転属者は夏服姿で身も心も寒かった。上海までは明確なれど、その先はどこへ。また任務は兵員の初めての輸送指揮。携行品の天津貨物廠よりの受領等、心中は錯綜として寒さも手伝って、司令部で出発の申告をした時は、抜いた軍刀も寒さで落としそうになった。途中北京と南京では、兵站宿舎に入り、予定通り上海十三軍司令部に到着して安堵した。直ちに呉松鎮砲台湾に集結して、全支那総軍各地より転属して来た将兵二〇〇名、第二野戦根拠地隊司令部通信班高橋隊四個小隊が編成され、第三小隊長を命ぜられる。兵器受領や、戦地に向けての乗船準備をする多忙の中で、大陸は見納めとばかり、貯金を全部おろし、半年分の給料の前払いを受け、金を使うことももうなからうと、上海の街に出、あの頃カフエーといった店で、飲んで歌って女遊びにと札束を減らそうとしたが、腰の凶囊やぶから札束は減らず、金を使うのに苦労したのはこの時だけだった。

呉松鎮より乗船、台湾に向かう。高雄に入港、二泊下船。また飲み歩く。台湾を出発した輸送船は、十九隻の堂々たる船団

で、勝ち戦さの偉容を誇り、とても頼もしく、戦地に行く悲愴感など微塵もなかった。フィリピンのマニラに寄港。これより先は敵潜水艦の出没が激しくなるために、三千トン級の船に乗り換える。荷物の積み換えに「アメリカ」の捕虜を使い、初めて敵兵と接し、珍しく誇らしく思った。マニラ港を出で、先の二番船が敵潜水艦の攻撃を受け沈没。船団はクモの子を散らすごとくハルマヘラ島のワシレ港に逃げ込む。やっとの思いで上海出港。以来一か月振りにジャングルに覆いつくされたニューギニヤ本島マノクワリに上陸することが出来たが、明け方早々敵機の爆撃を受け肝をつぶした。

第二軍の戦闘序列に加わったが、灼熱の太陽の下、生まれて初めて経験することばかり。負け戦で忽ち地獄の戦場と化し、西部ニューギニヤの各所を転戦し、ジャングル内で心ならずも終戦を迎え、数少ない生存者の一人に加えられた。翌一月セレベス島のマリンブン捕虜収容所に送られ、二一年六月和歌山県田辺港に故国の土を踏むことが出来、入隊以来七年六か月の軍隊生活に終止符を打った。

時は移り、世代は変わっても、国民皆兵の軍隊の義務を果たした人生は私のみならず末永く後世に語り継ぎたいものです。

原稿とか文章など書いたことがなく、これを書いているうちに、次から次と当時のことが思い出されます。

先頃戦友有志六人で、西部ニューギニヤの旧戦場に戦没戦友

の慰霊の旅に参加し、玉碎の島ビアク島、マノクワリと二〇日の旅。東京の町で人骨がゴロゴロしていたら大騒ぎするだろう。今も草むす屍が遠近に散乱している。旧戦場の跡片付けも終わっていない今、当時を思い悲惨な敗戦とはいえこの地に眠る戦友を偲ぶ時、感無量である。

機会が有りましたら陸行苦マノクワリよりヤカチ、イドレを書いてみたい。

